

CRASEED NEWS



No.51・52

発行：NPO法人リハビリテーション医療推進機構CRASEED／年3回発行／第51・52合併号（2023年1月5日発行）
〒560-0054 大阪府豊中市桜の町3-11-1 関西リハビリテーション病院内 TEL：06-6857-9640 http://craseed.org

コロナ禍を乗り越え、3年振りの現地参加へ

第59回日本リハビリテーション医学会学術集会への参加を振り返って

2022年6月23日から25日の三日間、第59回日本リハビリテーション医学会学術総会がパシフィコ横浜ノースで開催された。専門医を取得した後の初めての学術総会に3年ぶりに現地参加しようと演題を応募した。

私の演題は三日目の午前中、赤核振戦のリハビリ経験について発表した。中脳にある赤核はギランモラレの△を構成し、錐体外路系に参与するといわれているが動物種によって大きさや機能が大きく異なり、齧歯動物を用いた破壊モデルが作成できず、未だに神秘に満ちた器官である。様々な小脳経路や錐体外路経路が赤核を通過し、同側性、対側性の多彩な症状が時期を違えて発生する。退院後5年もフォローしている私の症例は、半年後には対側の手指に振戦が、3年後には眼振が生じてきた。最初の症状である左上肢の粗大な振戦には重錘がかりうじて有効であった。小脳失調と異なり症状の軽快が全く見られず、発表後フロアから助言を直接いただいたのだが、やはりリハビリにも治療にも苦慮するとのことでした。

障害者スポーツ関連の講演が第一会場に連なっていた。私の印象に残ったのは盲目の金メダリスト河合純一氏の講演だった。河合氏は左

目失明の状態でお出、15歳で全盲とされた。5歳から水泳を続け、失明後も厳しい訓練を続けられた。1992年のバルセロナから6大会出場で金メダル5個を含む計21個のメダルを獲得された。2016年IPCから日本人初のパラリンピック殿堂入りを果たされた。

河合氏は講演でパラリンピックの歴史、現状等をご本人の絶え間ない努力の経緯を交えて熱く語られた。テレビでしか見ることのできない、金メダリストのお顔を拝見し、熱を直接実感し、そのお声を拝聴した。これも現地参加の賜物と思う。河合氏が講演中に放たれた金言をご紹介します。

「できないと言うのではない、どうやったらできるか考えるのだ。」
還暦も過ぎて、本来の怠け者が更にひどくなった私も、残りの余命もさばらずに頑張りますと思わざるを得ない。
久しぶりに開催されたオフ会で、私の隣に座った若者は、私の脳外科医時代の35年来の知己の御息だった。小さい頃にお会いしたこともあるかもしれないと告げられ、感無量。CRASEED会員同士の交流も現地参加の賜物です。

洛西シミス病院 高橋 潤 先生



学術集会現地参加の勧め

2019年12月に中国武漢でCOVID-19の感染が確認され2020年には一気に世界的パンデミックとなり、学術の世界にも大きな影響をもたらした。それまで現地に参加することが当たり前であった学会参加はオンラインに移行しPC画面上での学会参加が主流となってしまった。オンライン参加が可能となった事で、現地参加に比較して時間的にも空間的にも効率的に参加可能となったことは、学会参加のハードルを一部下げることに寄与したのかもしれないが、同時に現地参加で得られていた様々な交流が閉ざされたこともまた事実である。2022年度に入り世界的にもwithコロナでの社会的な距離感が緩和し多くの学会で現地開催が可能となってきた。

6月に横浜で開催された第59回日本リハビリテーション医学会学術集会では一般演題での発表とポスターセッションでの座長を担当したが活発な質疑応答や、セッション終了後も演者の先生との名刺交換や意見交換も盛んにあり、久々に賑わいを感じる学会となった。また第38回日本義肢装具学会学術大会ではシンポジウムの座長と演者を務めたが朝一のセッションにも関わらず会場は立ち見が出るほど

盛況で多くの議論が飛び交う有意義なシンポジウムとなった。また現地参加したこれら2つの学会における共通点として企業ブースの賑わいが大きな変化であった。2020年、2021年共に可能な限り学会の現地参加をしてきたが、やはり会場の企業ブースは閑散としており、配置されているブースの担当者も最低限となっていた。

今回の学会では企業ブースは活気に溢れ、参加者と展示企業の担当者が活発に意見交換をしていた。私自身も気になるデバイスを展示している企業ブースに積極的に足を運び、担当者の話を聞き、自院における臨床場面での活用にイメージを膨らました。また交流のある企業ブースにも立ち寄り、企業の担当者や旧知の先生方と直接的に会話をし、様々な情報交換を行なった。学会は学術の最前線であるとともに情報のアップデートや他大学や他院の先生方と情報交換が可能な貴重な現場であることを再認識した。オンラインでのPC画面と眺めつこする事も悪くはないが、現地参加だからこそ可能な直接的なコミュニケーションがもたらす情報や、そこで構築される人間関係は何事にも変え難い貴重な財産となる。また付け加えるならば、ご当地グルメや、学会参加の合間の観光なども現地参加の大きな楽しみになり、積極的な学会への現地参加を勧めたい。

西宮協立リハビリテーション病院 勝谷 将史 先生

専門医試験

合格者の声

症例集めは、早期からどのような症例が何例必要になるかを確認しておき、経験症例をリスト化しておくことをお勧めします。また、退院サマリを症例レポートと同じフォーマットで書くように指導医の先生にアドバイスいただき、おかげで直前に慌てることなく準備ができました。試験は過去問を5年分解きつつ、必要な部分は成書を確認して周辺知識を整理しました。口頭試問は対象分野発表後に、指導医の先生方に模擬試験をやっただき、想定問答を頭に入れて臨みました。ただ必ずしも想定通りにはいかない質問もあり、そういう時は日々の臨床でどれだけ症例を診ているかを問われていると感じました。試験を受ける前は不安や緊張を感じることもありましたが、振り返ると、自身の知識・経験の手薄な分野を整理できると同時に、日頃の臨床への向き合い方を改めて考える良い機会になったと思います。道免先生を始め、CRASEEDの先生方、お忙しいところ手厚いサポートをいただき本当に有難うございます。この場を借りて御礼申し上げます。

関西リハビリテーション病院 橋本 泰成 先生

専門医試験は何といってもレポート作成が山場だと思います。私は元来の計画性の無さから、締め切り3か月くらい前から大急ぎで作りましたが、できれば当該患者さんを担当している時から作成していくと良いと思います。一つ一つの症例をしっかりと振り返り、形式知としてまとめることで一生の財産となる学びを得られると思います。こだわりをもって取り組んだ症例を選択すれば、口頭試問でも慌てることなく、堂々と答えられると思います。試験勉強に関しては、過去問やテキストを一通り解いて、その問題を解くにあたって必要な知識をINPUTするという方法である程度は対応できました。試験当日はそれなりに緊張しましたが、思いのほか試験官の皆様は優しい方ばかりで有難かったです。

晴れて専門医になることができ、ようやくスタートラインに立てましたが、これからも生涯、知的好奇心を心に抱き、学習しつづけていきたいと思っています。

西宮協立リハビリテーション病院 青柳 潤 先生

病院紹介

医療法人ひまわり会 八家病院

昭和32年に姫路市北西部に整形外科として開院し、昭和54年に法人化し、名称を現在の医療法人ひまわり会八家病院に変更し、今年で創立65周年を迎えました。平成10年からリハビリテーションを開始し、当初は整形疾患中心でしたが、現在は、多岐にわたる疾患に対するリハビリテーション医療を提供しています。

当病院は、急性期病床(39床)・回復期リハビリテーション病床(33床)・療養型病床(39床)のいわゆるケアミックス型の病院ですが、回復期専門病院への転換に向け体制を整えている所です。また透析室・歯科を備えており、2名のリハビリテーション専門医と、脳神経内科専門医、脳神経外科専門医、リウマチ専門医、ペインクリニック専門医、透析室医師、歯科医師の常勤医師が在籍し、整形外科専門医、消化器病専門医の非常勤医師の応援もいただいています。

回復期リハビリテーション病床では、リハビリテーション科と各科の専門医が密接な連携を取り、充実した医療提供を維持しています。

急性期病床では、整形外科を主とした手術や、ペインクリニックで痛みをやわらげる治療を行っており、療養型病床では、神経難病の患者様や、透析中で脳血管疾患後の患者様等が入院されています。各病棟において、病期に合わせたリハビリテーションを行っています。



外来では、内科・外科分野で幅広いプライマリケアに対応しています。内科分野では、一般内科全般に加えて、脳神経内科・リウマチ科の専門外来を開設しており、外科分野では脳神経外科・ペインクリニック外科・整形外科の専門外来を開設しています。各分野のスペシャリストと共に患者様の多様な病態に対応し地域医療への貢献に邁進したいと考えています。

八家病院 中空 智子 先生

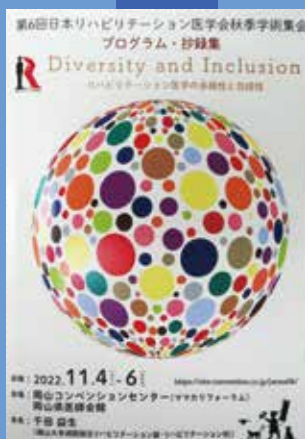


参加報告

秋季学術集会

第6回

日本リハビリテーション医学会



2022年11月4日～6日に開催されました第6回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会に参加しました。会場は岡山県岡山市にある岡山コンベンションセンター(ママカリフォーラム)でした。

私は初日の午後に一般演題の演者として発表しました。5分間の発表と2分間の質疑応答で、リハビリテーション科を専攻して間もなく担当した症例を発表しました。伝えるべき点を選び5分間の発表に落とし込むことといただいた質問を2分の中で返答するという2つの難しさを感じた7分でした。2分の質疑応答の時間は自分にとっては短く感じ、よりディスカッションをしたいという気持ちがありました。そのためには1症例のみならずもっと多くの症例を経験しながら、リハビリテーション医療の進歩に役立てられる形でデータを集めていきたいと、今後の診療への気持ちが更に高まりました。その気持ちの上で、拝聴した講演、演題発表では評価尺度に注目し、知らない評価尺度については利点欠点、国内海外での立ち位置を調べるようにしました。今後の診療では新しく学んだ評価尺度で有用なものを選び、患者様の経過を主観客観の両方で確認したいと思います。その他勉強不足であった治療を最先端の部分まで確認できたり、他の病院の先生方の優秀な発表をみて自分の足りない点を確認できたりととても有意義な3日間でした。

最後になりますがこのような貴重な時間をいただけたことを大変ありがたく思っております。発表スライドを添削くださり、当日も支えてくださいました先生方、学会の間少ない人数の中病院で診療してくださいました先生方、学会参加の機会を与您いただきました方々に厚くお礼申し上げます。また、美味しいきびだんごを作ってくださいている岡山の方々にも心よりお礼申し上げます。

兵庫医科大学病院 田中 雄士 先生

2022年11月4日から11月6日まで、第6回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会に参加させていただきました。場所は岡山駅のすぐ近くで、交通の便の良いところでした。研修医の際に内科系の学会で2回、発表をさせていただきましたが、どちらも新型コロナの影響もありオンラインでの発表で、現地会場での口頭発表は今回が初めてでした。発表は11月5日の夕方、それまではなかなか落ち着かず早く終わってしまいたい気持ちもございましたが、その分、前日から他の方々の発表を見て、会場の場に慣れる時間を持つことができました。発表は、Fisher症候群に関して行いました。リハビリテーション科のレジデントとして働きだした頃に担当させていただいた2症例を、所見や経過を対比させながら発表しました。緊張はありましたが、予演会をしていただいたこともあり、概ね時間内に発表を終えることができました。質問は2つあり、その内の一つに上手く返答できなかったのは反省点でしたが、まずは発表を終えることができ良かったと思っております。自分の発表以外では、義肢に関するハンズオンセミナーに参加したり、ご高名な先生方の講演を聴講したりしました。聴講したい講演が重なることも多かったのですが、後日、Web配信を聴講することを考えています。また、他病院に働いている医局の先生方にお会いしたり、初期研修中にお世話になったリハビリテーション科の先生にお会いしたりする機会もございました。その点でも、学会に参加して良かったと思っております。発表に関しましては、事前に抄録やスライドの添削、予演会をしてくださった指導医の先生方に深く感謝しております。来年も発表の機会をいただく予定ですので、次回はより良い発表をできればと思っております。

兵庫医科大学病院ささやま医療センター 長田 尚樹 先生

第6回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会が2022年11月4日(金)～6日(日)に岡山コンベンションセンターで開催されました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、現地開催とオンデマンド配信のハイブリッド形式となっております。今回は演者として現地参加させていただきましたが、会場は感染防止対策を行いながらも活気のある雰囲気でした。なかなか大人数で集まることが難しくなった昨今だからこそ、今回の学会はリハビリテーション医療に携わる多職種、多領域の方々一堂に会する貴重な機会であるということに改めて実感しました。

私は昨年までの初期研修中2年間では学会参加の経験がなく、今回で学会の現地参加は2回目であり、演者としての参加は初めてでした。初日の昼過ぎに現地入りしたのですが、まだまだ学会自体に慣れていない上に2日目の夕方に発表を控えていることもあり、講演などを拝聴しながらも少々落ち着かないというのが正直な所でした。発表本番ではフロアの独特の緊張感に非常に圧倒されましたが、事前に医局内での予演会を行っていたので、何とか無事に終えることができました。今後も上級医の先生方からのご指導を賜りながら、日頃から症例検討会や勉強会などでの発表の機会を通して経験を積み、成長していきたいと思いを新たにいたしました。

学会3日間を通して様々な分野の講演、シンポジウム、ハンズオンセミナー、ランチョンセミナー、症例報告や研究発表、企業の展示があり、リハビリテーション医学の基本から最先端のトピックス、各施設での取り組みなどを知ることができ、どれも興味深いものでした。回りきることができなかったセッションは、オンデマンド配信で視聴して知見を深めていきたいと考えております。そして、吸収した知識を日々の臨床に活かせるように精進していく所存です。この度はこのような貴重な機会をいただき感謝申し上げます。

兵庫医科大学病院 豊田 奈央 先生

ISPRM 2022 in Lisbon

PORTUGAL
Lisbon



この度、ポルトガルのリスボンで行われたISPRM (International Society of Physical and Rehabilitation Medicine) 16th World Congressに参加しました。2020年に行われたISPRMの参加報告も書かせていただきましたが、約2年ぶりにこのように筆を執ることができ、長いようで慌ただしく過ぎた2年を思い返し感慨深いものを感じます。

アメリカ オランダでの開催を最後に、COVID-19の流行により国内外共にダイレクトな交流ができなくなりましたが、再び交流が再開できる気配の感じられる学会でした。以前より参加者は少ないように感じましたが、学会会場では活発なディスカッションが行われ、展示場に設置されたポスターの前には多くの人が集まり、久しぶりの再開を楽しむような会話も聞かれました。以前のように他大学や他国の先生方とお酒を酌み交わしながらの交流は少なくなりましたが、直接顔を合わせて会話することにより、日々の診療や研究に対する意欲が湧いてくるのを感じました。

また、この学会では、リハビリテーション医学会国際委員 才藤栄一 副理事長がHerman J. Flax Lifetime Achievement Awardを受賞されました。2009年に千野直一元理事長が同賞を受賞され、日本人では2人目の快挙となります。日本人の先生が国際的に活躍している場面を目にし、日本はリハビリテーション医学の発展を牽引していく国のひとつであることを実感しました。リハビリテーション医学は、まだまだ発展の余地がある分野であり、地道にエビデンスの構築を図り、様々な新しい試みがなされています。国際学会に参加する度に、その最先端に触れ、私もいつかこの世界になにかひとつ残していくことができればと、しゃんとして前向きに取り組んでいくことができます。兵庫医大に来てから恒例となった国際学会参加、これからも続けていきたいと思っております。

兵庫医科大学病院ささやま医療センター 岩佐 沙弥 先生